

「荻谷信和博士のライフワークを偲んで」

北野昭彦

荻谷信和博士は、さん付けで呼びあう畏友の一人であった。だから、荻谷さんと呼称することをお許しいただこう。

遠い記憶がよみがえる。学友らがロシア歌曲「我らの仲間」を斉唱し、大学前書店の喫茶室でタンゴ「ア・メデア・ルス」の甘い旋律が流れていた一九五六年。私は三回生だった。

啄木が独歩を絶賛していたことを、和田繁二郎先生の「啄木研究」の講義によって知った。啄木の『明治四十一年日記』を読むと、たしかに「真の詩人は国木田独歩だ」と、くりかえし記されている。啄木は独歩のどこを高評価したのか。レポートを提出する前に、この疑問を解いておきたかった。

私は筑摩書房版現代日本文学全集の『国木田独歩集』をひらいた。その「月報」の研究文献目録中に、『論究日本文学』に発表された荻谷さんの論文があった。荻谷さんは『論究日本文学』の声価を高めた先学の一人だったのである。

荻谷さんは眉目秀麗で透き通った声の、貴公子然とした青年であった。今でも思い出すごとに、笑みを浮かべた晩年の面影と、あの若き日の残像がオーバーラップする。

その後、和田先生と荻谷さんと私が、連れだって近代文学会に出席したこともある。私が学会で研究発表した後には、和田先生のカメラで撮影された記念写真のなかに、口頭発表している私の姿や、荻谷さんたちと寛いでいる姿が写っていた。

荻谷さんも私も、和田先生の呼びかけに応じ、広津柳浪研究会に加わった。和田繁二郎編著『近代文学の知識人像』（一九八五年）の執筆陣にも加わった。そのころには私たちも独り立ちの研究者になっていて、和田先生とも対等に議論した。談論風発。けれど和氣藹々と進行した。ムードメーカーは荻谷さんだった。

民友社系の文学の研究に携わる私たちは、山田博光氏（帝塚山学院大学学長）、平林一氏（愛知女子短期大学教授）、吉田正信氏（愛知教育大学教授）らと民友社研究会を結成し、大がかりな共著出版を重ねた。荻谷さんも有力メンバーであった。

荻谷さんは他者を批判するときの口調も穏やかで、包容力があつた。その人柄が学風や論文の文体に反映されていた。

一九五二年、荻谷さんは日本文学専攻三回生に編入学。
一九五四年、最初の論文「独歩の『牛肉と馬鈴薯』——とくとく

『驚異』について」を、『論究日本文学』に発表。

以来、大学勤務の間に『国木田独歩——比較文学的研究——』（一九八二年）、『独歩文学の基調』（一九八九年）へと集成されるまで、芦谷さんの文学研究は独歩を中心に展開した。

今では、日本近代文学の起源を独歩にみる柄谷行人説もあるとはいえ、独歩は忘れられつつある。だが、あのころ独歩の研究は学界で囁望され、文壇人の独歩評価とも呼応していた。

中野重治の「私の胸に特にしばしば往来する一列の詩人がある。北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩、石川啄木。（中略）彼らが未完成のままに残した多くの仕事は、矛盾と焦燥と動乱との中に棲むわれわれの胸に幾多の考ふべきものを与へずにはおかない」という断章が、研究者たちを透谷、独歩、啄木の研究へと駆りたてるインパクトになった時代であった。

島尾敏雄が、「二葉亭から始めて、露伴、鷗外、一葉、鏡花と読み、独歩につき当たると、丁度山の中でさんざん道を迷った拳句に閑謐な野原にぬけて出て、そこに清冽な小川がさらさら流れているのみつけた塩梅です」と『作家論』で評したのも一九五三年、芦谷さんが独歩の研究を始めた時期と一致する。

その十一年後の一九六四年、中島健蔵らの編集で学研版『国木田独歩全集』が刊行された。中島健蔵は、独歩の文学に「現実生活の暗い雲の切れめに光る青空のような、人生観の精髓」と「時代を越えた、ある一つの抒情」を読みとっていた。

独歩は死の直前まで「思想上の感化は、英のカーライル、ウオ

ゾオース等より、作品上の感化は、ツルゲーネフ、トルストイ、モオパッサン等より享受」し、「従来の我文壇とは殆ど全く没関係の着想、取扱、作風を以て」創作したと言っていた。だから独歩の研究は西洋の文学・思想との関係を中心に進んでいた。

だが、独歩には東洋思想の影響も認められる。これを重視した芦谷さんは、独歩の精神形成の過程を窺える著作（『欺かざるの記』、随想、評論、遺稿）と、『老子道德経』『莊子内篇』『莊子外篇』『王陽明文粹』『王陽明先生詩抄』などの原文とを入念に照合し、独歩の文学テクスト生成の秘密に迫った。

そして、独歩はワーズワースやカーライルの影響をうける前の幼少期に、漢学塾で王陽明や老荘思想を吸収しており、「独歩に見るワーズワースやキリスト教の受容においても、それが老荘的基盤において老荘に媒介された形で摂取された」ことを実証し、「それは決して外国文化の単なる模倣ではなく、むしろ外来文化の刺激による、一種のすぐれた創造であった」と結論づけた。

この基礎研究の成果が作品研究に活かされた。たとえば、「独歩の作品全体の要諦をその出発点において示したもの」といわれる小説「忘れえぬ人々」についての論考である。

主人公の青年文学者・大津が、青年画家・秋山に語り聞かせる忘れえぬ人々は、旅の目に映じた路傍の人であり、大自然の点景のように、小島の磯で働く漁夫、阿蘇の麓で俗謡を歌って家路をたどる若者、三津浜の巷で、濁流の底を流れる清流のような琵琶の音を奏でる琵琶僧、等々である。ぼくは今夜のような晩に灯

のもとで生の孤立を感じて哀情を催すと、主我の角が折れて人懐かしくなり、これらの人を思い出して、我も他も共に無窮の天地に生まれて悠々たる行路をたどり、無窮の天地に帰る者だという実感が生じて名利競争の俗念が消え、心の平穏と自由を感じる。ばくはこの題目で存分に書いてみたい、と大津は語る。

芦谷さんはここに、主我・我執の否定、名利・猜疑・煩悶の超克による心の平穏・自由・平和の感得、一切無差別平等・自他一如の同朋意識、という老荘思想の影響の痕跡を見た。つまりこの小説も、老荘思想に媒介されたワーズワースやカーライルの受容により、独自に開花した文学だというのである。

それに大津の語る忘れえぬ人々は、永久無限の天地自然の懷に生きて生業を営む人々であり、「新時代の要求とは何であるか。人を社会の一員として視るばかりでなく、天地間の生命として観んことを求むるのである」という、独歩の「天地生存」の人生観を体現した人々である。この人生観は独歩の生い立ちにも根差している、と芦谷さんを見て、次のように論じた。

独歩は家族制度と家父長制の崩壊した家庭に育ち、各地に転々と流寓した故郷喪失者である。だからこそ独歩は、家族制度や家父長制の崩壊した「山林海浜の小民」¹¹「忘れえぬ人々」の三津浜の琵琶僧、「たき火」に登場する流浪の翁、「源おぢ」に登場する乞食、夢破れ故郷にも安住できなかった「河霧」の主人公・豊吉、流浪の末に馬島に漂着した「酒中日記」の主人公・今蔵、浮浪の身で肺を病んで斃死した「窮死」の主人公・文公、等々の放

浪者を登場人物に選び、路傍の「小民」や旅の目に映じた「小民」にも愛情を感じて、それを描いたのである。

以上の論考により、独歩の文学は日本近代文学の主流とは異質であることを、芦谷さんは明確にした。そうして独歩の代表作を論じつくした芦谷さんの研究業績は、どんなに高評価してもし過ぎることはない。だが、唯一惜しまれることがある。

芦谷さんの新説は、既成の文学史の枠を外した視界から、独歩の文学を見直す可能性を孕んでいた。が、そこまでには至らなかった。その可能性を妨げたのは、西欧中心主義の「単線的な」進歩史観¹²「単線的な」リアリズム文学史観であった。

独歩のユニークな文学像を明視しても、この進歩史観によってポジティブな意味の生産を拒まれた。この不可能を可能にするには、既成の文学史の枠組みを変えて新たな文学史像を構築するための、研究者側の文学観・世界観の再構築が求められる。

が、昭和時代の研究者の大方は、単線的な進歩史観を当然のことと信じていた。単線的な進歩史観は、他の可能性の一切を封殺し、排他的、暴力的に一時代を支配してきた。

しかし、その後続出した様々な批評理論がクーンの「パラダイム転換」説で括られたとき、一時代を支配した単線的、一元的な思考の枠組みが崩れ、多元的な方法で普遍性をめざす営みへと移行した。そして著名な研究者数名が依願退職した。

芦谷さんはどう対処したか。答えは、「傘寿を迎えて」刊行された最後の著書『国木田独歩の文学圏』（二〇〇八年）にある。

この書は、時空、素材、思想、人脈などの「多様な概念を本として」構成されている。でも「あとがき」には、「近年、文学の研究方法は著しい変化を見せた。然しそれに気を奪われても仕方がない。最早傘寿を迎えたわたくしはわたくしの方法を貫き通す以外にない」とあり、独歩の文学史的把握は「浪漫主義から自然主義」という既成の文学史の枠を出ていない。

が、文学史の枠を外して個々の作品を論じた各章は、注目に値する。「富岡先生」を娘への求婚譚と見て、その対立葛藤が、功利主義に対し、愛と誠と労働に生きる人の勝利へ展開する物語と読み、「少年の悲哀」を、運命観を主題とし、その雰囲気、環境描写と人生を浪漫的な筆致によってみごとに融合した小説と読んでいる。単線的な進歩史観からの脱却である。

旺卷は「窮死」論である。「窮死」は社会悲劇であり、境遇悲劇であり、人間存在・人生の不思議と「運命」への「驚異」を描いた作品でもある、と多様な読みの可能性の幅を広げている。そうして「浪漫性と現実性の二つの要素を小篇の中に緊密に有機的に結合させることに成功した稀有な優れた作品」と、ポジティブな評言で結んでいる。このようなテクストの読みの深さと、物語世界の多重的な意味の生産は、独歩の再発見につながる。独歩のような「十二分の感興を蔵して其五六部を描く」短編作家の文学は、このような読みと意味生産によって再発見され、読み継がれていくかもしれない。

芦谷さんが、もっと気力旺盛な年齢で「パラダイム転換」の現

実に直面していたら、と私は思う。芦谷さんは新しい時代の動向に敏感に反応し、同意の意思をさ示している。

だが、批評理論や文学史観を再構築するには年を取りすぎている。「最早傘寿を迎えたわたくしはわたくしの方法を貫き通す以外にない」とは、批評理論や文学史観を再構築したくてもできなかった、己の老いの自覚と悔しさの表出ではないか。この言葉には遺言めいたニュアンスも感じられる。

昭和の初めに生誕し、昭和という、時代の限界に囲い込まれて老いてもなお、囲いを破ろうとした芦谷さんの仕事の総決算が、この書である。その遺徳を偲び、これが次世代の研究者の新しい視点から、再検討され、再生される日の来ることを念じて、この拙文を芦谷さんへの手向けにしたい。

(きたの・あきひこ) 元龍谷大学教授